

山 紫 水 明



[永代神社]

第 1 3 1 号



第一三一号 目次

表紙

目次

特別寄稿

永代神社（多摩全生園「国立ハンセン病療養施設」内鎮座）

天皇皇后両陛下、皇太子殿下御奉送迎

京都府神社庁主催、京都府神道青年会共催

神職さんと行く伊勢参宮

OB懇親会・平成二十八年新年会

各委員会報告

近畿・中央報告

編集後記

24 17 9 7 6 5 3 2 1

永代神社

なが よ じん じゃ

(多磨全生園「国立ハンセン病療養施設」内鎮座)

東京・東村山市にある国立療養所多磨全生園の鎮守様こと『永代神社』は、八十二年の歴史があります。国立療養所の中にある神社ということで、国が建てたものだと思われるかもしれませんが、実際はそうではありません。現在、この永代神社について詳しくお話して下さる方が残念ながらおりませんので、開園七十年を迎えたときに発行された『俱会二処』（患者が綴る全生園の七十年）をもとに後述させていただきます。

「らい病（現・ハンセン病）」は、本人だけでなく、家族にも偏見差別が及び、ひとりが「らい病（現・ハンセン病）」にかかる周囲二十人が不幸になるといわれており、療養所は『終の棲家』と形容されておりました。

現在に至っては、回復者（入所者・退所者）の講演活動を中心とした啓発活動によって、権利が回復されつつあります。療養所においても人権啓発の地として多くの方が訪れるようになっていきます。しかしそれもここ二十年であり、それまでの冷遇は惨憺たるものがありました。その中で力強く生きてきた全生園入所者について「永代神社」を通じてお読みいただければと思います。

（以下 俱会二処より）

本書（俱会二処）は、多磨全生園・七十年の歴史であるが、ら

いと完全隔離という重圧の限界状況の中で、いかにして対応し、生き、変革していったか、人間の実験記録である。（発刊のことばより）

昭和七年二月十一日紀元節を機に入院者たちは神社建設を思い立った。故郷を遠く離れ、入院生活も長くなり、もうここから出てゆくことが出来ないと観念したのであろう。自分たちの第二のふるさとの鎮守様が欲しくなった。入院者、職員、篤志家の拠金を集め敷地の土盛りから始まった。もちろん労力の一切は患者たちの肩にかかっていた。ちょうど患者の中に宮大工の経験のある者がいて、この人を棟梁として工事は始まった。（中略）伊勢神宮新宮造営の時の余材が払い下げられることを知ったH院長は、早速造神宮副使に申請書を提出、その結果、木材五石が届けられた。代金は、二十八円十五銭であった。本殿の土台になる土盛りは、二列に並び遠くから土をバケツに入れ、それを手渡しで運んだ。あまり元気でない人も参加したということであるが、せめて基礎工事にだけでも：：そんな思いで列に加わったのであろう。信仰に関係なく、低賃金でありながら、みなよく働いた。築山、納骨堂、病棟などの建造物、そして神社と昭和初期の入院者は懸命に働いた。小遣い銭が欲しい、それだけの理由ではなかった。ひとつのものを作り上げることは見捨てられた故郷への思慕であり、恐ろしい勢いで迫ってくる死への恐れが、鋸を、鋤を、すきを持たせ、もつこを担がせたに違いない。



〈1936年頃か〉

厳しい労働で、手や足の傷を化膿させ、指や足を切断する者もいたほどである。工事は、二カ年を費やし、昭和九年五月七日上棟式が挙行された。内務省神社局によって神社名は永代ながよと命名され、祭神は、伊勢大神宮、豊受大神宮、明治神宮の三柱という欲張ったものとなった。

五月二十二日深夜、遷宮式、翌二十三日、村内の水川神社、八坂神社の神官を招聘して盛大な臨時大祭が竣工式を兼ねて挙行された。ついでお祭りの行事がくりひろげられた。癩予防協会から寄贈された子どもみこしと、たるみこしが寮の間を賑やかに練りまわったが、入院者の花相撲大会が一番の人気を得た。神社の近くに立派な土俵もでき、夕方から子ども相撲、暗くなると大人の部になる。途中、握り飯と麦茶が運ばれ、夜の一時過ぎ千秋楽となった。おはやし、福引もあった。この祭りは入院者が指折り数えて待つ年中行事の一つとなった。

昭和十年五月二十一日鳥居、十二年五月二十二日石の灯籠一対が入院者らの献金で建てられ、十二年十一月十日、旧帝室博物館の礎石の払い下げを受け、それで玉垣が造られ、完成まで丸四年がかかった。

マッカーサー司令部は、政府施設内における神社は廃止すべし、

と命令、鳥居は解体され、草むらの中に転がっていたが、昭和三十年再建された。（以上 倶会一処 第二章十三永代神社より一部抜粋）

入所者の減少に伴い、平成十九年に奉賛会会員最後の一人が、亡くなり、解散・例大祭等のとりやめの危機にありましたが、入所者自治会が一部を引き継ぐ形をとり、多くの方のご協力を賜りながら例大祭を毎年挙行しております。

現在まで三回行われている全生園・人權の森絵画展（小中学生対象）では、永代神社を画材として出展されることが多く、子供から大人まで永代神社は多くの方に愛され、私たちを守ってくれる存在です。

多磨全生園は将来構想のなかで、歴史的建造物の保存をのぞんでいます。永代神社に加え、アニメーション監督の宮崎駿さんが寄付を行ってくださった復元が実現した『山吹舎』や『旧図書館』（現・理美容室）はその対象となっています。しかし、老朽化が進む一方で補修については一向に話が進まず、いつ倒れてしまってもおかしくないような状態です。永代神社の補修が一日でも早く行われ、ハンセン病の歴史を伝えるとともに多くの方の心に残る鎮守様であり続けることが私たちの願いです。

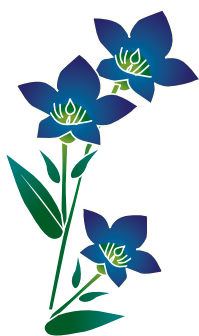
*この寄稿は多磨全生園入所者自治会の方よりご協力を賜りました

天皇皇后両陛下御奉送迎



天皇皇后両陛下におかせられましては、「神武天皇二千六百年式年祭」御親祭（拝礼）の為、畝傍山東北陵（神武天皇山陵）また橿原神宮に二泊三日（平成二十八年四月二日～四日）の日程で行幸啓遊ばされた。

両陛下は、京都駅にて新幹線から近鉄線に御乗り換えされる為、両日共に「日本会議・京都」の会員を中心に京都府氏子青年連合会会員、京都府神道青年会の会員にて「御奉送迎団」を結成し、新幹線・近鉄線改札内外にて個々に国旗小旗を京都駅利用者に配布し、共に御奉送迎をご奉仕させて頂いた。



皇太子殿下御奉送迎



皇太子殿下におかせられましては、国立京都国際会館に於いて平成二十七年十一月二十九日から十二月二日まで開催された「第五回世界工学会議」に御臨席の為、十一月二十九日から二日間の日程で御入洛された。二十九日は、御本殿が新たに国宝に指定される事になった石清水八幡宮を御参拝になられ、三十日は、「第五回世界工学会議」に御臨席、お言葉を述べられた。

御入洛（行啓）、御帰京（還啓）される両日共に京都駅に於いて京都府氏子青年連合会（両日）を中心に出会の八名（三十日）が国旗小旗を京都駅利用者に配布し、皇太子殿下の御奉送迎をご奉仕させて頂いた。



京都府神社庁主催、京都府神道青年会共催 神職さんと行く伊勢参宮

去る平成二十八年二月十九日、京都府神社庁主催、京都府神道青年会共催による「神職さんと行く伊勢参宮」が、二十七名の学生参加のもとに開催された。

早朝、着慣れないであろうスーツに身を包み、心躍らした表情の学生の皆を乗せ、バスは一路伊勢を目指し出発。伊勢参りはしたことがあっても、スーツ着用での参拝（正式参拝）は、皆初めてのことでないだろうかと主催者側は推測し神宮について様々な説明も車中にてなされた。



まず外宮に参拝。往路車内で式年遷宮のDVDを鑑賞してため、「さっき見たところだ！」との声も聞こえ、その後の「せんぐう館」の見学により、さらに理解が深まったようであった。

昼食は、伊勢名物の「手こね寿司」、「伊勢うどん」を参加学生、主催者皆で美味しく頂いた。その後、徒歩で内宮へ。宇治橋から神宮神職の森権禰宜様にご案内をいただきながら、御正宮

へと足を進め、皆さんには初めてであろう御垣内参拝（正式参拝）をしていただいた。森権禰宜様の「皇族の方でも、総理大臣でも、参拝の際に進める位置が限られているのです。」というお話から神宮が、どれほど神聖で、そして今回の参拝がどれほど貴重な体験であるか感じてくれたのではと参拝前とは違う学生の正された姿勢から見受けられた。その後の御神楽奉納では慣れない正座に足を痺れさせながらも、神楽に聞き入り、見入っている様子であった。

参拝後は、「おかげ横丁」での散策。これまでの緊張感もほぐれ、学生の皆さんは「おかげ横丁」にて思い思いにひと時を過ごし、学生らしく「もつとゆつくり見て回りたいかった。」等の声が聞こえる中、再びバスに乗り、最終行程である「神宮徴古館」へ。ここでも神宮のご厚意により御神宝等について詳しく説明を頂き、皆は、一つ一つの説明を熱心に聞き、時には質問も投げかけていた。また様々な壮麗な御装束、御神宝に女子学生達は目を輝かせていた。

今回、前年に比べると参加者は少ないようであったが、中にはベトナムからの留学生の参加もあり、道中、主催者の一人にベトナム語を教示して頂く場面も見受けられた。余談になるが、ベトナム語で「こんにちわ」は「シンチャオ」、「ありがとう」は「カムオン」というそうである。主催者側は、参拝の作法や神苑での説明等、理解してもらえるか心配であったが、丁寧な作法による御垣内参拝、真摯に説明を受ける姿を見る事ができ安堵の表情を浮かべていた。そのような留学生の姿から、和歌の「なにごとの おはしますかは 知らねども かたじけなさに 涙こぼるる（西行）」が思い出され、伊勢には、世代を超えて、国境を越えて、グローバルに何事も感じ

る事が出来る聖域であると改めて気付かされるひと時であった。

午前八時に京都を出発し、多くの日程を終えた学生の皆さんは疲れからか瞼を閉じる者も多く、

帰りの車内にはバスのエンジン音だけが響きわたっていた。今回の参宮を主催者側は、充実した参宮旅行になっただろうか心配していたが、京都駅八条口での解散時に、笑顔で「カムオン」と言ってくれた留学生のひとことにより肩の荷が下りたのではと思う。

学生参宮の二月十九日は二十四節氣の一つ、「雨水」の日であった。まだ寒さが残りつつも、天から降るものが雪から雨に変わり、氷が溶けて水になり、土脈潤い起こる、とされる日。まさに当日は、寒さが残りながらも、空は快晴、春の到来を感じさせるような天気であった。そんな空のもと参宮された学生の皆さんの心も、きっと晴れやかになったことと思う。そしてまたこのような若い人たちの心によって、今回の参宮が、次の遷宮に向けての雨水の日になったのではと思う。

(御香宮神社 大瀧徳子)



OB懇親会

去る平成二十七年十一月二十七日「がんこ三条本店」に於いて組織委員会・親睦委員会主催によるOB懇親会が開催され、年末の忙しい時期にも関わらず十名のOB諸先輩方、四十四名の会員参加のもと盛大に行われた。

恒例の親睦委員会による余興は「叩いてかぶってじゃんけんぽん」が行われた。

OBチーム、執行部チーム、会員チーム、新人チームと四チームに分かれ、各チーム壮絶なバトルを繰り広げた。

OB諸先輩方が会員に叩かれている姿は見ていて背筋の凍るような思いであったが、OB諸先輩方のご理解とご協力のおかげで非常に和やかな雰囲気の中ゲームが繰り広げられた。

OB諸先輩方ご無礼大変失礼しました。この場をお借りして深くお詫び申し上げます。





親睦委員会による余興は大盛況の中、幕を閉じた。



ゲームは会員チームが優勝をし、余興が終わると思いきや、三位という中途半端な結果に終わった執行部に喝を入れる為、執行部がハリセンで叩かれるというサプライズもあり、



平成二十八年新年会

余興を行った結果、和やかな雰囲気懇親会が行われ、OB諸先輩方からの青年活動に対するご賛同や激励のお言葉を頂戴し、とても有意義な時間を過ごす事ができた。
OB諸先輩方のお言葉を糧に、これからの青年会の活動をより良く繋いでいこうと再確認できた懇親会となった。

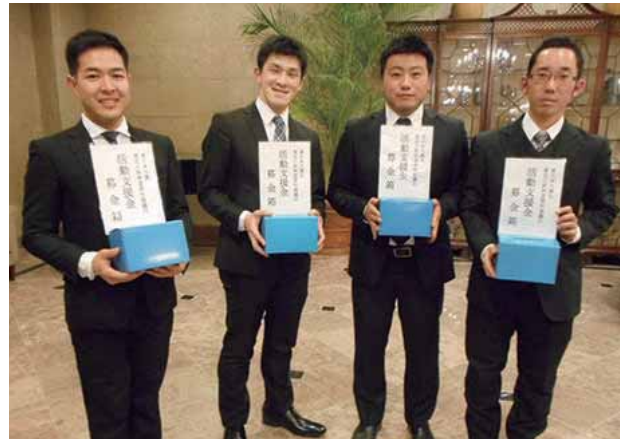
(北野天満宮 湯浅和雅)

去る平成二十八年二月八日に、京都センチュリーホテル「瑞鳳の間」に於いて、京都府神道青年会「平成二十八年新年会」が開催された。
当日は京都府神社庁田中安比呂副庁長、京都府氏子青年連合会杉本寿一会長をはじめ、各協賛業者の方々、OB諸先輩方に御臨席頂き、会員を含め九十一名の出席となった。今回も受付の際「東日本大震災復興支援」の為の募金活動が渉外委員会により行われ、多く

の皆様は募金して頂いたことは誠に有り難い限りである。

時刻、生寫親睦委員長司会の下、先ず六人部副会長による開会の辞、次に櫻井会長による挨拶の後、ご来賓の紹介が行われた。ご来賓を代表いただき京都府神社庁田中安比呂副庁長に祝辞を賜り、京都府氏子青年連合会杉本寿一会長の発声による乾杯の後、懇親会へと移った。

懇親会中には恒例の親睦委員



会主催の余興が行われ、今回は「風船割りゲーム大会」が催された。OB諸先輩方、また会員の中より選出された四名が壇上に上がり、誰が勝利するのかテールブルごとに一名指名し当てるゲームである。練習では石清水八幡宮梶貴嗣君が勝利し、本番では伏見稲荷大社水戸康隆君が優勝その瞬間には会場は大盛り上がりとなった。

和やかな雰囲気の中、懇親会

は進み、折上稲荷神社稲川昌実先輩による万歳三唱が行われ、中田副会長による閉会の辞にて新年会は盛会の内に終えた。

来賓の方々やOB諸先輩方により温かい言葉を頂き、会員には正月明けの疲れた身体に英気を養う充実した新年会であった。

(伏見稲荷大社 角河平彬)

各委員会報告

教化委員会

七五三の集い

去る平成二十七年十一月十一日(水)、大將軍八神社(生寫宏盛宮司)に於いて教化委員会主催「七五三の集い」が開催された。

この事業は児童養護施設に入所している子供たちを招き、七五三のお参りをさせていただくことが目的である。

当日は市内にある五カ所の施設から計二十六名の子供たちが集まった。櫻井会長の挨拶にはじまり、御本殿にて七五三の御祈禱が執り行われ、記念撮影後、生寫宮司ご案内のもと方徳殿(宝物館)



にて神社所蔵の御神像の拝観、大將軍商店街妖怪ストリート（二条通り）に出没するという妖怪（付喪神）と大將軍八神社に伝わる邪氣祓い（刀印）について説明をしていただいた。

その後、神社社務所ホールにて、妖怪（付喪神）に化けた委員達が櫻井会長と松大路副会長、そしてジャグリングマン（田中渉外委員長）をつかまえ、社務所ホールに集まった子供たちの前に登場。その姿に皆驚きながらも、教わった邪氣祓い（刀印）を必死に行い、子供たちの力で三名は助け出され、そのお礼としてジャグリングマンによるジャグリングの披露が行われた。

教化委員会では、この事業を開催するにあたり開催神社ならではの催しがないか委員会で話し合い、「百鬼夜行」の舞台として有名な大將軍八神社が鎮座する一条通（大將軍商店街妖怪ストリート）の怪異伝説と神社に伝わる邪氣祓い（刀印）を取り入れ、七五三詣の思い出となるよう考案した。

真剣にお参りする姿と一所懸命邪氣祓い（刀印）する姿、そしてジャグリングマンを声の限りに応援する様子から、短い時間ではあったが、子供たちにとっては楽しい一時であり人生儀礼のひとつを経験する貴重な一日

になったことと思う。これを機に今まで以上に神社に親しみを持つて頂ければ幸いである。

（八坂神社 丸茂広知）



親睦委員会

落語の魅力聞き落語を楽しむ

平安神宮記念殿ホールにて、平成二十八年三月四日午後七時より親睦委員会主催研修会が「落語の魅力聞き落語を楽しむ」という主題のもと落語家の桂福丸氏を講師に迎えて開催された。

桂福丸氏は、京都大学を修了後、平成十九年に桂福團治に師事。それ以来、多くの方々に、また幅広い年齢層に落語を披露されてきた。

今回の研修会では先ず落語の基礎的な事柄について講話を賜り、その後実際に落語を披露して頂いた。

講話において、枚岡神社での神事「注連縄掛神事（お笑い神事）」と赤ちゃんを例に「笑い（笑う）」とは神より賜わった表現である。また、芸能は元々は、神に仕える者が演じ、神聖視されていた。」等といった講話を頂き、神社に奉仕する者にとって今後につながる大変有意義な内容であった。

その他、様々な落語に関する

事柄を桂福丸氏の豊富な知識とユーモアを交えた講話により会員は堅苦しさを感じる事無く落語について深く理解出来たのではないかと思う。

なお、落語は「時うどん」を主体に口演頂き会員は、また更に落語の世界に魅了されていた。（大將軍八神社 生寫紀之）

親睦委員会

ボウリング大会

去る五月二十七日（金）ラウンドワン河原町店にて、毎年恒例の親睦委員会主催ボウリング大会が開催された。今年もOB諸先輩とご家族を





はじめ、会員、巫女、事務員が参加し和気藹々で行われた。先ず櫻井会長の始球式によりスタート、今回は個人戦の為、人数の都合上フロアが二つに分かれていた。そのような事もあり櫻井会長は、二度の始球式をする異例の幕開けとなった。ゲームがスタートすれば皆優勝を目指し、笑顔の裏に隠された闘志あふれるプレーを各々が見せ、あつという間に時間は過ぎていった。



二ゲームを終え、懇親会会場である「さざんか亭六角店」へ移動し、ボウリングの結果発表を待ちながら各々が懇親を深めた。そして結果は、今年の優勝者は男子の部が石清水八幡宮の吉田君、女子の部が賀茂御祖神社の青木さんと告げられ皆様々な表情を見せていた。

今回の大会の興奮冷めやらない中、次回はどんなドラマが待って

いるのかと期待をふくらませながら来年のボウリング大会を会員は心待ちにしている様子であった。

(平安神宮 生寫和頭)

事業委員会

カレンダー作製

事業委員会では、株式会社秋江様、京都奉製株式会社様の御協賛により毎年恒例のカレンダーを作製致しました。今年度は、松浦すみれ氏（イラストレーター）によるイラストを主体に構成されており、彩り鮮やかなカレンダーを作製させて頂く事が出来ました。なお、カレンダーは、京都府内各神社等に頒布をさせて頂きました。



事業委員会

文化財の防火・防災について

去る五月二十日、伏見稲荷大社豊穰殿に於いて事業委員会主催の研修会が開催され、会員を始めOB先輩、巫女、事務職員合せて総勢六十八名が出席した。

本研修会は、講師として京都市消防局予防部文化財係長・梶原大助先生をお招きして、「文化財の防火・防災について」と題したご講演を賜った。



まず始めに、先の平成二十八年熊本地震の被害状況の説明がなされた。この度の地震では多くの文化財が被災し、中でも甚大な被害を受けた阿蘇神社・熊本城については写真を用いながら詳細な説明がなされた。

次に京都市における文化財防火に対する取り組みの歴史や文化財社寺等に設置されている防災設備、万が一災害が発生した場合の活動方法についてお話をいただき、各々の奉務神社の防災管理を見直す良い機会となった。



続いて、それぞれが神社の責任者であると仮定して、万が一、神社で災害が発生した場合にどのような判断をして具体的にどのような活動をすべきかを問われる『災害対応ゲーム』が行われた。すべての問いに正解はなく、参加者はそれぞれがなぜその結論に至ったのか、その理由を発表し合い、活発な意見交換がなされていた。

信仰とともに先人たちによって守り伝えられてきた社殿をはじめとする文化財を後世に継承していく使命、責任がある我々神職にとって、文化財の重要性を再確認するとともに防火・防災意識を高めることが出来た大変有意義な研修会であった。

(伏見稲荷大社 黒木章弘)



渉外委員会

西山浄土宗

・中部青年僧の会との交流会

去る三月十四日、渉外委員会主催による他団体との交流会として、西山浄土宗・中部青年僧の会との交流会が、櫻井会長を始め、中部青年僧の会・京都府神道青年会、合わせて三十五名の参加のもと、「がんこ二条苑」にて開催された。

今回の交流会は、京都府神道青年会としてはおそらく初めての、仏教系の青年会組織との交流会となった。参加者は神道青年会側の方が少なく、始まる前は不安に思うところもあったが、交流会が始まると非常に盛会であった。

先ず櫻井会長の開会の挨拶があり、中部青年僧の会の田中会長の乾杯の発声により交流会は開始された。今回の交流会の席は、年齢順に向かい合い座る席としたため、各テーブルでは同世代ならではの会話が盛り上がる事ができたように思う。

その後、お互いの会員全員の



自己紹介が一人ずつ行われたが、中部青年僧の会は、若くてもさすがは僧侶の会と思うほど冗舌な会員が多く、それに負けじと神道青年会側も対抗して笑いをとり、非常に盛り上がる事ができた。続いて、お互いの会からの質問事項を、それぞれの代表者が答え合う質疑応答の時間となり、普段から疑問に思っているものもなかなか聞けないことをお互いに確認しあうことができ、大変意義のある時間となった。

神職と僧侶は、お互いに近い存在であると世間から思われているが、実際に交流する機会は少ないのが現状である。今回の交流会は、真面目な話から、俗な話まで、雅俗入り混じった様々な話が飛び交ってはいたが、神職と僧侶のそれぞれの社会的な立場の違いや、今後のお互いの目標等も話し合うことができ、非常に有意義な交流会となったように思う。

閉会は、六人部副会長による恒例の締め挨拶があり、最後は参加者全員で記念撮影を行い、盛況の中、散会となった。

(石清水八幡宮 田中博志)

渉外委員会

チャリティバザー

縁日で賑わう北野天満宮境内（絵馬所）に於いて平成二十八年五月二十五日に恒例となった渉外委員会主催「チャリティバザー」が開催された。

当会から、櫻井会長を始め、田中渉外委員長以下十五名の助勢



早めの開始となった。

バザー開催中は、委員長を始め会員一人ひとりがバザーの収益金が京都府を通じて交通安全推進運動に充てられる事を呼びかけ、バザーの趣旨を説明する場面や、会員の中には来場者の「もうちょっとまけてくれへんの。」のひと声に戸惑いをみせながらも対応する姿がみられた。

今回、会員の来場者とのやり取りが良好であったのか、品物が厳選されていたのか例年より品物が順調に出て行ったのではないかとと思われる。その中でも来場者の一番の人気は神社関係者のバザーならではのものである酒類であった。

全体を通して今年も終始、和やかな雰囲気の下、バザーは進行

参加であった。当日は、曇天であったが北野天満宮の縁日という事もあり他府県からも多くの参詣者が来社され大変な賑わいをみせていた。そのような中での開催という事もあり会員が品物の陳列を終えると開場を待ちわびている一部の来場者の中には個々の品物を手に取り会計を待っている姿がみられた。予定では午前十時からの開始であったが開場を待ちわびる来場者が増えた為、三十分

し盛況の内に納める事が出来た。今回も会員にとって普段の社頭とは異なる来場者との対応から良い経験になったのではないかなと思う。

なお、バザー前日は、田中委員長以下会員二十二名により品物の仕分け、値札付け等が北野天満宮齋館で行われたが、多くの会員の助勢により短時間で終わる事が出来た。

最後に、境内・齋館をお貸し頂きました北野天満宮様を始め、献品頂きました協賛業者様また関係各位に紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。



(石清水八幡宮 田中博志)



渉外委員会

ヤチマタ基金募金活動



縁日で賑わう北野天満宮に於いて平成二十八年一月二十五日の午前十時から午後三時三十分迄、櫻井会長以下七名の会員が田中渉外委員長の指揮の下、氏

子青年連合会杉本寿一会長と共に募金活動を行った。当日は冷え込み厳しい中であつたが、天候も良く初詣の参拝者に加え縁日の来訪者が多く、会員は行き交う方々に幟や募金箱手に、「募金、宜しくお願いします」と、青年神職らしく元気な声での呼びかけや、ヤチマタ基金の説明を加えながら募金活動を行った。

会員の熱意が伝わったのかこの時勢において四万二千九十



四円の募金を頂戴することが出来た。

また同年二月三日午後四時から午後八時迄、節分祭で賑わう吉田神社に於いても募金活動は行われた。櫻井会長を始め、OB諸先輩も数名ご奉仕頂き、会員を含め十九名での活動であった。冷え込み厳しい日ではあつたが、天候に恵まれた事に加え募金活動の参加人数、また節分祭への来訪者が多く見えになられたということもあり、五万五千七百二十一円もの募金を頂戴することが出来た。



なお、募金は京都府神社庁を通し「ヤチマタ基金」として京都府に寄贈され交通安全推進事業に充てられる。最後に、境内を御借りしました北野天満宮様、吉田神社様にはこの場を借りて厚く御礼申し上げます。
(渉外委員会)



組織委員会

『洛声第二〇八号

・一〇九号・一一〇号発行』

組織委員会では会員の近況を報告する機関紙「洛声」をそれぞれ然るべき時に発行した。

この「洛声」を通して会員同士の情報共有、また親睦を図ると共に組織力も強化していきたい。

これからも、会員皆様の近況等を漏れ落つる事無く掲載していきたいと思しますので、情報収集の御協力をこの場を借りてお願い申し上げます。



近畿地区報告

御堂筋パレード

去る、平成二十八年一月二十七日、大阪府神道青年会主催で近畿地区の事業でもある『一・二七御堂筋パレード』が開催された。この事業は、一月二十七日の「国旗制定記念日」に、国民の祝祭日にどの家庭でも国旗が掲揚されるようお願い御堂筋をパレードして呼びかけるものであり、毎年一月二十七日に開催されている。



当日、午後二時三十分には大阪市中心部に鎮座する坐摩神社境内に集合し出発式がとりおこなわれた。まず大阪府神道青年会友田会長にあわせて坐摩神社を参拝し、国歌斉唱、主催者を代表して日本会議大阪運営委員長並びに神道政治連盟大阪府本部長である衛藤氏による主催者挨拶がなされた。諸注意の後、小旗の振り方などのリハーサルが行われた。

そして、午後三時より大国旗



を沿道の一般市民に配布し国旗掲揚推進を呼びかけていた。なお、今回の参加者は、神道青年会をはじめ、関係諸団体、一般参加者など二百五十名を超える人が参集した。

私は、御堂筋パレードに今回はじめて参加させていただいた。このパレードで沿道を行き来する多くの方々に国旗掲揚の推進アピールができて熱い関心を得ることができたのではないかと感じた。

また、歴史ある事業に参加できたことに感謝申し上げます。ありがとうございました。

(向日神社 六人部是充)

を捧持した神道青年近畿地区連絡協議会長谷川会長を先頭として、参加者一同が四列縦隊を組み出発した。先導車搭載のスピーカーから流れるアナウンスのもと参加者は手に持つ国旗の小旗を振り、本町から御堂筋を通り難波までの道程を警察官の指示のもと約一時間程行進した。午後四時頃、難波に到着し解散となった。また道中においては大阪府神道青年会会員が、日本国国旗の小旗やステッカー

親睦ゴルフコンペ



去る平成二十八年三月二十九日、大阪府神道青年会の担当により、神道青年近畿地区連絡協議会「親睦ゴルフコンペ」が大阪府堺市にある天野山カントリークラブに於いて開催され、ベテランから初心者まで総勢四十七名、当会からは櫻井会長をはじめOB先輩、会員計三名が参加した。

当日は雲一つない快晴で最高のゴルフ日和の中、午前九時の開会式に始まり、長谷川近畿

地区会長の始球式、そして参加者は北・西コースに分かれ終始プレーを楽しんだ。

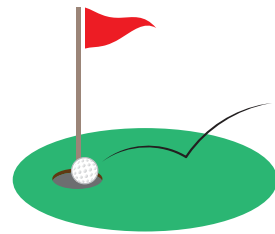
プレー終了後には、クラブハウスで懇親会と表彰式が行われ団体、個人各賞が発表された。





第二回連絡会

団体の優勝は大阪府、二位は兵庫県、三位は奈良県で京都府は惜しくも入賞を逃した。
(北野天満宮 松大路和弘)



第二回連絡会・研修会が、平成二十七年十二月二日に賀茂御祖神社（下鴨神社）にて開催された。当日は、丹塗りの賀茂御祖神社楼門が映える晴天となり、ご参加頂いた他府県の会員からは、「京都は暖かいですね。」と、声が漏れる程の穏やかな天候となった。

先ず参集殿に於いて、約八十名（うち当会から二十七名）の会員出席のもと賀茂御祖神社権宮司 宮嶋様（当会OB）に

ご挨拶を賜り、引き続き二班に分かれ研修会として「賀茂御祖神社正式参拝並びに御遷宮後の境内（本殿）拝観」を賀茂御祖神社様のご厚意により約一時間程賜った。御遷宮後の装い新たに美しく相整った御本殿を前に西行法師が伊勢の地にて感じられた「何事のおはしますをばしらねどもかたじけなさに涙こぼるる」の歌の如く、そこにおわします大神様を全身で感じると共に、新たに氣の高まった大神様の御神威を賜る事が出来たのではと思う。今回の研修会で得たことはそれぞれで異なると思うが、参加会員がこれからのご奉仕の上で、一時でも今回の研修会を思い出して頂きご奉仕に役立てて頂ければ幸いである。

研修会に引き続き、第二回連絡会が参集殿において開催され、開会の辞の後、神宮遙拝、敬神生活の綱領唱和、長谷川近畿地区会長挨拶と続き当番府県挨拶として櫻井会長が挨拶をした。その後、来賓を代表して、押立神社宮司文室久明参与よりご祝辞を戴いた。次に座長に選出された櫻井会長進行の下、中央報告、神青協特別委員会報告、近畿地区事業委員会報告、各単位会報告がそれぞれ行われた後、会員皆で聖寿万歳を奉唱し、六人部近畿地区



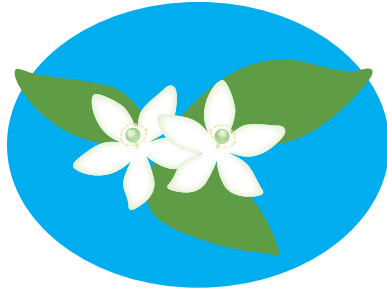
副会長による閉会の辞をもって閉会した。

連絡会に引き続き、場所を「KKRくに荘」（香淳皇后ご実家・久邇宮邸跡）に移し、尾崎忠麿顧問、林秀俊参与、文室久明参与、藤森長正参与ご臨席の下、懇親会が開催された。「同じ釜の飯を食う」という言葉があるように、参加会員は同じ鍋をつつきながら、懇親を深め、絆も深めていたようである。まさに合言葉である「近畿はひとつ」という懇親会であったのではと思う。

最後に会場をお貸し下さり、また格別なるご厚意を賜りました賀茂御祖神社様にはこの紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。

第三回連絡会

ホテルグランヴィア京都において、平成二十八年三月八日、第三回連絡会が開催され近畿二府四県から六十二名（当会から二十名）が参集した。



万歳を奉唱し、六人部近畿地区副会長の閉式の辞をもって第三回連絡会は滞りなく閉会した。

引き続き、同ホテルにて、尾崎忠麿顧問（豊国神社）、中田幹男顧問（伏見神寶神社）ご臨席の下、懇親会が開催された。長谷川近畿地区会長挨拶の後、ご来賓の紹介がなされ、来賓挨拶では尾崎顧問から『近畿はひとつ』の合言葉を大事にして頂き、神道青年近畿地区連絡協議会は全国に例をみない素晴らしい集まりであるので誇りを持って、今後も当会を盛り上げて頂きたい。」との言葉を賜った。また中田幹男顧問のご発声による乾杯へと移った。会員は改めて、近畿地区各单位会との連携と協力の素晴らしさを感じ、これからも次世代に繋げていかなければならないと、感じた。



連絡会は次第の通りに、開会の辞、神宮遙拝、国歌斉唱、敬神生活の綱領唱和、長谷川近畿地区会長挨拶と進められ、当番府県として櫻井会長が挨拶をした。次に、座長に選出された櫻井会長進行の下、中央報告、特別委員会報告、近畿地区事業委員会報告、各单位会報告が行われ、終わりに「神道青年の歌」、「美しき山河」を斉唱の後、稲本近畿地区相談役の先導により一同声高らかに聖寿

枚の写真が表す歴史的背景や祭礼の由来について説明、またご自身の思い等を加えながらお話をして戴いた。私達も知りえない京都の歴史や祭礼について話される中田昭先生のお話に姿勢を正して興味深く聞き入っていた。改めて京都の持つ奥深さを感じたのではないかと思います。また、写真の技術についても触れられ、「良い写真を撮るには枚数を撮らないと上手くならない。また感情を込めることが大事である。」と、ご教示頂き、一同は、一層真剣な表情を見せていた。最後に「皆様には、日本人の精神文化に貢献して頂きたい。」と、言葉を括られ研修会は終了した。



のではないかと思います。懇親会は、終始和やかに進みそれぞれ会員は、より一層の親睦を深める事が出来たのではないかと思います。

また連絡会に先立ち、研修会として写真家の中田昭先生を講師にお迎えし、『春夏秋冬・美しき日本の京都』と題してご講演を戴いた。

ご講演では、先生ご自身が撮影された京都の四季折々の風景（年中行事・祭礼）を春から順にスクリーンに映し出し、一枚一



地区研修会



第三回連絡会の翌三月九日には、参加会員四十八名（当会は十四名）の下、京都府宇治市にて地区研修会が開催された。

当日は、あいにくの雨天であったが、黄檗山・萬福寺の坐禅体験と珍しい「普茶料理」を頂くという内容で境内案内以外は雨に当たることなく行われた。

午前九時十五分頃、京都駅八条口京都アバンティ前を出発した貸切バスは、午前十時に黄檗山・萬福寺に到着。先ずは、本堂を始め境内を拝観させて戴いた。

その後、「法堂」にて二十分間程の坐禅体験をさせて頂いた。

時折、静寂の中に響きわたる会員が受けた警策の音が皆の



背筋を改めて正していた。

昼食は、萬福寺内にて「普茶料理」を頂いた。普茶とは、「普く衆に茶を供する」という意であり、「どなたでも分け隔てなく飲食を提供する」というおもてなしの料理といえる。また、肉や乳製品の代わりに野菜や豆腐で同様の食感、風味を調理によって表現する「もどき料理」とも云われ中国版精進料理とされる。会員は、坐禅体験の緊張感から解放され、和やかな雰囲気

囲気がさながら昨日の懇親会の続きのようであった。

昼食後は、平等院を学芸員の方による特別な説明の下、一時間程拝観し、その後は各自、宇治神社、宇治上神社、近隣の茶舗等を巡るなど自由散策を楽しんだ。日程は順調に進み午後三時三十分頃、京都駅にて解散となった。



今回のこの研修会を日々のご奉仕に活かして頂ければ、当番府県として幸いである。

中央報告 神宮研修会

去る三月十六日・十七日の二日間にわたり、平成二十七年度神道青年全国協議会神宮研修会が伊勢の神宮会館にて開催され、全

国各地より、約二百四十名が参加し、京都からは八名が参加した。

今回の研修会では、「神代在今」を主題に、第一講では神宮権禰宜の吉川竜実先生に「神宮のおまつり〜神代在今」と題して、内宮、外宮のそれぞれのご祭神である天照大御神、豊受大御神が祀られる由来と、式年遷宮、神嘗祭、六月・十二月の月次祭、外宮でのみ行われる日別朝夕大御饌祭などの

お祭りについて、最後に天照大御神に一年間御饌をお供えする常典御饌のお祭りについてご講義頂いた。

第二講では、神宮技監で宮林部長の笹岡哲也先生に「神宮宮域林について」と題して、神宮宮域林から、第六十二回式年遷宮に使用される全御用材の二割程度を間伐材であるが、賄われたこと、そして、その御用材が育つまで、百〜二百年程かかり、材になる良い木になるまでに刈込みや枝打ちといった作業が必要になるということなどをご講義頂いた。

講義を終えてから、夕暮れの神宮参拝、翌日になると、夜明けの神宮参拝があり、宇治橋から天照大御神の祀られている御正宮の往復間、冷気で身体が冷えつつも、五感を研ぎ澄ませて歩くことができた。

夜明けの参拝が終わると、第一〜第六の分科会にそれぞれ分かれて受講し、各々が神宮について一層詳しく学べた事であろう。

そして、全講義が終了し、神宮のお祭りは、先人達の弛み無き努力により、現代まで伝えられていること、式年遷宮は、宮域林を多年にわたり、維持管理して初めて行えることが分かり、私達青



『山紫水明』第一三二号

題字 頼新先生
編集 広報委員会

発行所 京都府神道青年会
発行日 平成二十八年六月三十日
印刷 株式会社ユニティー



年神職は、これからも神宮のお祭りの大切さ、宮域林の大切さを他の神職や氏子の方、そして次世代に伝えていかなければならないと決意を新たにすることが出来た。次回の大会は、広島県で開催する予定であり、志ある青年神職が、次回の大会に進んで参加し、研鑽を積むことを願う。

(鉾山神社 天岡秀人)



編集後記

先日、六月十六日、霞が関の厚生労働省にて「ハンセン病患者追悼式」が政府主催の下、斎行され、先月、五月十三日には、東京都東村山市の国立療養所多磨全生園（ハンセン病療養施設）内に鎮座する「永代神社」に於いて例祭が斎行されました。

さて、「ハンセン病」という名をどれだけの方がご存知でしょうか。かくいう私も恥ずかしながら知ったのは十年程前の事であり、当時は深く突き詰める事はありませんでした。この度の機会に深く知る事になり、私自身、様々な事を改めなければいけないと切に思いましたが、どうか、この山紫水明の御寄稿を一読して頂く皆様にも今一度、過去にあった事を直視して頂き先人の苦難を少しでも緩和出来ますよう、また、決して、「無」にする事無きよう現在（今）をそして、誇りある未来を公私を通して建設努力して頂ければ幸いです。

末文ではございますが、今号発行に際し御寄稿を賜りました国立療養所多磨全生園自治会を始め、国立ハンセン病資料館、また、原稿の執筆に御協力を頂きました会員の皆様にはこの場をお借りして御礼申し上げます。